

天下再興の戦いと私部城

小谷利明

はじめに

戦国時代、私部に交野城あるいは私部城と呼ばれた城がありました。

この城は、いつ造られたのか？

誰が造ったのか？

その城はどのような意味があったのか？

何人かの研究者がこのなぞを探りました。各研究者の結論はそれぞれ違う点があり、これをどう考えるべきか、ここで、十分な結論は出せませんが、なるべく広く、その可能性を探っていきたいと思います。

1、交野地域が畿内政治史で重要視されはじめるのはいつか？

①私部城の築城時期については、片山長三氏の南北朝期説

中西裕樹氏の信長上洛以前説

三説がある。

馬部隆弘氏の信長上洛後説

・中井均氏⇒南北朝期説はなりたたないと指摘

・中西説は、元亀元年（1570）の城主「安見右近」

安見氏⇒信長上洛前に活躍した飯盛城将安見美作守宗房との関係を考慮して信長上洛前から私部城の存在を推測

・馬部説は、安見右近の本拠 星田⇒私部ではない。私部を掌握したのは信長期からと推測（史料43・44・49）

いずれも難点のある説

中西説は系譜論からの推測。

馬部説がいう安見右近が星田にいた時期は、畠山高政・安見宗房が三好長慶と戦い、敗北して河内を出ている時代。⇒右近だけがなぜ星田にいられたのか自体が問題。

*あるいは、三好方に降伏しているのか？

いずれにしても本拠にいられたかどうか分からない。論証不足。

そこでここでは、交野が畿内政治史で重要な意味を持ち始めたのはいつか？という問いから始めたい。

享禄年間（1528～32）木沢長政が飯盛城を築城⇒北河内が政治的中心地になる。

天文畿内一向一揆（1532～5）

⇒一揆方 畠山植長（政長系） 紀伊へ。

反一揆方 木沢長政（義就系内衆）・遊佐長教（政長系守護代）

その他 畠山義堯（義就系、一向一揆のため自刃）

天文畿内一向一揆後

木沢長政 飯盛城で畠山在氏を擁立

遊佐長教、高屋城で畠山長経、つづいて弥九郎を擁立

天文11年（1542）、木沢長政の乱

⇒畠山植長の河内復帰。遊佐長教と和睦。

この時、飯盛城の東に位置する大和国鷹山の領主鷹山弘頼が、畠山軍に加わる。

⇒鷹山から交野を拠点に飯盛に備える（史料3）。この時から、交野は重要な地域拠点となった。

鷹山弘頼の性格

○大和官符衆徒の家。大和の最も重要な家のひとつ。弘頼の時代になり、歴史の表舞台に登場。

○弘頼は、河内勢300人を率いて、大和で活躍（史料5）。

弘頼が率いた河内の軍勢はどこ地域の侍か。

「言継卿記」天文14年（1545）5月24日条に見える牧郷の戦国領主野尻治部泰の軍勢は500人。織田信長が斎藤道三に対面したときの人数が700人だから、戦国領主の軍事力として300人は決して少なくない。300人は交野庄から動員できる程度の軍勢と言えよう。弘頼は、牧・交野一揆の動員を期待されている。この時代の畠山氏の軍勢の主力（史料8～11）。

⇒鷹山弘頼は、単に交野に着陣しただけではなく、交野庄の軍事動員権を持った可能性がある。

○また、遊佐長教によって鷹山弘頼、安見宗房が山城守護代となる。（史料6・7）

⇒安見宗房の登場

○安見宗房は、鷹山とともに軍事行動するなかで、新たに注目され登用された人物。史料18を見ると、弘頼は、畠山氏に出仕しており（高屋城？）、畠山家中のなかに入っていた。

鷹山氏の拠点 交野

2、安見宗房の活躍

鷹山弘頼の死

- 鷹山弘頼は、安見宗房と対立し、天文22年5月に高屋城で自刃(史料19)。
- 弘頼の自刃は、大和国人を反安見に駆り立て、鷹山弘頼の息子藤政は、筒井氏とともに反畠山方として活動を始める(史料20)。鷹山は牢人と表現されるなど(史料28~30)、基盤を失った。あるいは、大和鷹山地域自体も安見氏の基盤か(史料58)
- 当然、交野庄の支配も出来ていない。一方、筒井は、畠山氏に屈服し、臣従していた(史料31~36)。⇒交野を安見が支配することは十分可能
- 鷹山氏は永禄11年段階で、私部郷の知行地を三好三人衆方の篠原長房に安堵される(史料71)。
- ⇒鷹山が弘頼段階で私部郷に知行地を持っていたことが判明

安見宗房の性格

- 「抑安見ト申物ハヲチカタ殿ト云人の中間ニテアリケルカ」とあるように、安見宗房は「ヲチカタ殿」の中間であったという。鷹山弘頼と活動することで、その実力が認められた人物である(史料14)。
- 宗房は文化人としての性格を持ち。茶道では、相当な名物を所持し、息子野尻満五郎は、禁裏で能を公演するなど、文化面で顕著な活動をしている(史料26・27)。
- 遊佐長教は、鷹山や安見が活動する以前から、両郡代制を実施しており、上郡代は南河内を、下郡代は北河内を担当した。遊佐長教没前には、上郡代は萱振賢継で高屋城に居住し、下郡代は安見宗房で飯盛城に居住したのであろう。
- また、高屋城には、北河内最大の領主野尻治部丞泰や遊佐譜代の家臣中小路氏なども居住していた。このことから、主な畠山家臣団は、高屋城に居住し、飯盛城には、それほど主要な家臣団は住んでいなかったものと推察される。
- 問題は、北河内最大の戦国領主野尻治部丞泰が失脚し、その後を安見の息子野尻満五郎が継いだことである。北河内の支配は次第に安見宗房のものとなっている。
- 天文22年、鷹山弘頼が亡くなると、安見は、弘治年間、大和攻めを行い、筒井氏を屈服させる。弘頼没後の大和国人衆の離反に一定度、楔を打つことが出来たのである。当然、鷹山弘頼の地盤であった交野も安見宗房のものとなったと理解したい。
- なお、安見宗房の下郡代としての軍事力は、5千人とある。これは、北河内の戦国領主の軍事力の総数を上げたものと見られる。宗房の直轄軍は、6・7百人だろう(史料25)。

安見宗房の子供たち

野尻満五郎 天文10年(1541)生まれ。野尻を継ぐ。後、野尻兵衛大夫宗泰

萱振某 萱振賢継へ養子。(満五郎と同一人物の可能性も)
一族

安見助次郎房 宗房に比較的近い人物。(史料61)

安見右近丞 一族か。

安見与介? 右近の家来か

*安見宗房は俗説では河内守護代となったとするが、全くの間違い。遊佐長教の跡は、萱振賢継が押した遊佐長教の弟根来寺の松(杉か)坊。萱振滅亡後は、安見宗房が押した遊佐太藤、その後、畠山高政が支持した遊佐信教が就任し、信長上洛を迎える。

3、将軍の暗殺と天下再興の戦い

永禄3年(1560)の三好長慶VS畠山高政・安見宗房

⇒三好長慶—飯盛城主 三好実休—高屋城主

永禄5年(1562)三好実休、戦死。

しかし、畠山高政と安見宗房は、河内教興寺で敗れる。

⇒幕府分裂戦争(小谷)

永禄8年(1565)将軍足利義輝の殺害⇒天下再興の戦いが始まる。(史料62~69)。信長だけが、天下の戦争をはじめたわけではない。

○この時、安見右近丞が、畿内での戦争の主役のひとりとなる(史料67)。

⇒遊佐信教が安見右近丞を松永久秀に与える。安見右近丞は松永久秀武将として活動。

馬部氏は、安見右近丞を信長配下の武将とするが、間違い。

永禄11年(1568)1月、河内津田城が松永方の城となり、大和方面からの通交が出来なくなる。

⇒安見右近丞は大和方面での戦争が多かったが、河内方面での活動が可能となる。信長上洛直前に私部を確保か?

4、信長の上洛と私部城

永禄11年(1568)9月、織田信長が足利義昭を伴って上洛。

⇒松永久秀と対立していた三好三人衆は、没落。彼らの拠点だった飯盛城、高屋城、大和信貴山城などが没落。松永方は、多聞山城や津田城だけが拠点だった。

河内は畠山秋高(政頼が改名)が高屋城、三好義継を飯盛城に入った。(信長公記などの物語では、若江城とするが、天下再興の戦いで若江城は登場しない。城がなかったのである⇒信長公記は信用できない部分がある。後に若江城が登場するが、三好三人衆の拠点及び一向一揆の拠点として若江が拠点となり、若江城が三好義継の城となる。)

私部城主安見右近丞の切腹

元龜元年（1570）9月～天正8年（1580）8月 石山合戦

元龜2年（1571）5月30日 松永久秀が反信長方として挙兵。

5月11日 安見右近丞が松永久秀によって切腹させられる。

（史料74～82）

安見右近丞は、松永久秀に同調しなかったため、切腹した。

安見新七郎の登場と松永久秀の私部城攻め

元龜3年（1572）4月 松永久秀が私部城を攻撃。

17日 松永久秀、私部城の相城を造る。信長方がこれを落とす。（史料83～86）

29日 津田付城が落ちる。

○この戦いで、松永方により、私部城と津田城攻めが行われ、それぞれ松永方は付城を造る。

中西・馬部説は、付城を津田付城と理解しているが、それぞれの城が落ちたのは、別であり、ふたつの付城があったと理解すべき。私部城の付城はどこにあったかも、検討課題である。

○これを見ると、津田城と私部城は連動しており、永禄11年1月の津田城奪還と私部の問題は連動する可能性がある。

結論

私部城の築城時期は、今のところ、

- (1) 鷹山弘頼時代。
- (2) 安見宗房全盛期。
- (3) 永禄11年1月以降、津田城奪還後。
- (4) 信長上洛後。

が候補となる。

築城主は、(1)は、鷹山弘頼。(2)は、安見宗房か安見右近丞。(3)(4)は、安見右近丞。

私部城の性格

(1)(2)は、天文11年の木沢長政の乱後、畠山植長らが北河内支配を実現させるために造られた守護公権の城

(3)は、畠山高政・秋高・松永久秀らによる天下再興の戦いによって造られた城

(4)は、安見右近丞が信長上洛後に旧知行地回復が行われて拠点とした城で、松永久秀系の城。

参考文献

- 交野市教育委員会『私部城跡発掘調査概要報告書』Ⅰ 1995年
- 交野市文化事業団編『光通寺』交野市教育委員会・交野市文化事業団 1995年
- 片山長三 『交野町史』 交野町役場 1963年
- 鍛代敏雄 「枚方寺内町の構成と機能」(『戦国期の石清水と本願寺』
法蔵館 2008年
- 草野顕之 「一家衆の地域的役割—順興寺と枚方寺内町を中心に—」(『戦国期本願
寺教団史の研究』 法蔵館 2004年
- 小谷利明 『畿内戦国期守護と地域社会』 清文堂出版 2003年
- 小谷利明 「畠山植長の動向—永正から天文期の畿内—」(矢田俊文編『戦国期の権力
と文書』) 高志書院 2004年
- 小谷利明 「畿内戦国期守護と室町幕府」(『日本史研究』510号) 2005年
- 小谷利明 「中世の城郭と文芸」(『大阪春秋』149号)
(株)新風書房 2013年
- 中井 均 「交野城」(『日本城郭体系』第12巻 大阪・兵庫)
新人物往来社 1981年
- 中井 均 「交野城跡と北河内の城跡」(『まんだ地域文化誌』第16号) 1982年
- 中西裕樹 「私部城」(『図説近畿中世城郭事典』) 城郭談話会 2004年
まんだ編集部 1982年
- 野田泰三 「鷹山氏と興福院文書」(『古代中世史の探求 シリーズ歩く大和』)
大和を歩く会 2005年
- 馬部隆弘 「城郭由緒の形成と山論—「津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実
態—」(『城館史料学』第2号) 城館史料学会 2004年
- 馬部隆弘 「牧・交野一揆の解体と織田政権」(『史敏』6号)
史敏刊行会 2009年
- 福島克彦 『戦争の日本史11 畿内・近国の戦国合戦』
吉川弘文館 2009年
- 八尾市立歴史民俗資料館 『動乱の河内』八尾市立歴史民俗資料館特別展図録
1993年
- 弓倉弘年 『中世後期畿内近国守護の研究』 清文堂出版 2006年
- 吉田知史 「わたしたちの文化財 私部城跡(交野城跡)」(『ヒストリア』233号)
大阪歴史学会 2012年
- 吉田知史 「私部城(交野城)—信長の河内平定のクサビ、北河内の雄・安見氏の城—」
(『大阪春秋』149号) (株)新風書房 2013年